

電車から見える風景が変わり始め、遠くに町が見えてきた。「マナ」あの竹の子みたいなのは何。「どれ」「あれ、あれ、いっぱい生えているやつ」「あれはビルだ」「ビルって」「ビルは家のでかいやつ」「じゃあ、あれもビル。窓もない暗そうな家だね。モグラのお家かな」「のら」の指したものは工場の巨大な煙突であった。「のら」もうすぐ着くぞ。降りる用意をしろ。「のら」は窓の外の風景に釘付けとなっていた。巨大なビルが自分に覆いかぶさってくるような、そんな威圧感を感じていた。

駅の改札から二人が出てきた。「マナ」は慣れた感じで、駅の人ごみの中を進んで行く。「助けて、助けて」「のら」は人の流れに運ばれ、また改札に向かっていた。危なく改札の中に入る寸前、「マナ」は「のら」を掴み上げた。そして肩車をして人ごみを脱出していった。

『マナ』は時計を見た。「もう昼か。『のら』昼飯にでもするか。この近くにうまいラーメン屋さんがあるんだ。そこに行くか。」「ラーメンって。」「のら」はラーメンを食べたことがなかった。『マナ』は「あっち」と言っ、大通りの向こう側を指差した。その大通りには巨大な機械が、すごい勢いで行き来している。『のら』は唾をこくりと飲み込んだ。『のら』はビクビクしながら『マナ』の後についていく。『マナ』は横断歩道の前で立ち止まった。『のら』の前をすごいスピードで機械が通り過ぎる。『マナ』あれ何。「あ、あれか、車だよ。」「車。」「あれも電車と同じ乗り物だよ。しかし『のら』には先程の電車よりも怖く見えた。まず顔が怖かった。眼つきが悪く、いかにも噛み付きそうである。

